

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Notes for a description of “gesture”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江川, 清, EGAWA, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001062

身ぶりの記述について

江 川 清

非音声的コミュニケーションの種類

非音声的コミュニケーションの手段にはいろいろなものがみられる。これには、野球のサインやウインクなどのように発信者が特定の意図をもって行うものばかりではなく、発信者が無意図的にあるいは無意識に行った行為が解読者である受け手にとってはその中から何らかの意味を察知し反応せざるをえないようなものもある⁽¹⁾。

Argyle は対人行動の心理を研究する立場から、非音声的コミュニケーションの要素を次のように分けている⁽²⁾。

- 1) 身体接触
- 2) 身体的接近
- 3) 向き
- 4) 姿勢
- 5) ジェスチャー
- 6) うなずき
- 7) 顔の表情
- 8) 眼の運動
- 9) 外見
- 10) 会話の非言語的側面
- <11> 会話

また、南⁽³⁾は林⁽⁴⁾の表現材料の分類を基礎としながら、

- 1) 聴覚的——①各種の間投音 ②声の質 ③ことばの調子 ④沈黙 ⑤物理的な音（拍手，机を叩く音など）
- 2) 視覚的——①顔の表情 ②身ぶり，動作
- 3) 聴覚，視覚的（笑い声を伴う笑いなど）
- 4) 触覚的（握手，身体接触など）
- 5) 時間的（沈黙の時間，話を切り出すタイミングなど）
- 6) 空間的（相手との距離，座る位置など）

などに分けている。この二つの分類は一方が心理学者，他方が言語学者からのものであるという立場の違いによって分類の目の細かさがきわめて対照的であることに興味もたれるが，大様においてはほぼ一致していると思われる（Argyle の10は南の1，5を合わせたものにほぼ等しいなど）。他にもいろいろな観点からの分類があるが大同小異だといえよう⁽⁵⁾。

これらの非音声的コミュニケーションの研究はアメリカを中心として近年とみにさかんになってきている。そのうちでも、

- 1) パラランゲージ (paralanguage)——Guiraud のことばを補うコード⁽⁶⁾の中の「音調コード」、南の分類の1の①～④にほぼ相当する領域
- 2) 動作学 (kinesics)——Guirand の「動作コード」、南の2
- 3) (個体) 距離学 (proxemics)——Guiraud の「接近コード」、南の4～6。「空間学」と訳すこともある。

などが進んでいる。動作学、個体距離学は身体言語 (Body language) という名称で7、8年前から日本でも広く知られるようになってきている⁽⁷⁾。この方面の研究を推進してきたのは、文化人類学、精神医学、動物行動学などであった。これらはそれぞれ異言語文化圏接触、患者の深層心理、動物のコミュニケーションという言語以外の行動把握という問題を避けてとおることはできない領域だという宿命にあるからだといえよう。

本稿では非音声的コミュニケーション⁽⁸⁾のうち、Argyle の分類の4～6の姿勢、ジェスチャー、うなずきに絞り、その記述の方法——いいかえれば、「姿勢、身ぶり⁽⁹⁾などの行動の文字化」の方法を考えてみたい。

姿勢、身ぶりなどいくつかの研究

従来、姿勢や身ぶりに関して多くの研究が行われてきている。そのうち、筆者が本稿の参考にしたものをいくつかあげることにする。

1. Schefflen の三つの行動単位⁽¹⁰⁾

Schefflen は会話中の行動を観察した結果、1)あるまじったいくつかの文の発話中は頭や目はずっと同じ位置にあるが、文が終った段階でそれが終ったというシルシとして頭や目が別の位置に変化する 2)ひたすら聞き手にまわっていた人が、積極的な言語行動を起こそうとする段階で前こごみになるなど姿勢の大きな変化を示す 3)座っていた位置を変えたり、電話などで中座するなど位置を大きく変える という (広い意味での) 三種の姿勢の変化をあげてい

る。彼は1), 2), 3) をそれぞれ, point, position, presentation と呼んでいる。また, point は言語構造になぞらえれば語句や文, position は文節や話題, presentation は長い談話の連鎖としている。

2. Mehrabian のカテゴリー

行動研究においては、行動をカテゴリーに分けて観察し、各カテゴリーの頻度から何らかの特性を抽出しようとすることが多い——これを“カテゴリー・システム”(11) という。

Mehrabian は非言語的行動と内含的言語行動 (implicit verbal behavior) について以下のカテゴリーとその測定基準を示している(12)。

A. 位置と姿勢 (positions and posture of standing or seated)

1) 直接性 (immediacy) の次元

- ①身体接触(の総時間) ②(相手との)距離 ③前傾(の角度)
- ④視線交錯(の総時間) ⑤観察(相手の顔をみる) ——④の代替
- ⑥(相手への)向き(の角度)

2) 弛緩 (relaxation) の次元

- ①腕の位置の非対称性(の段階) ②(からだの)左右への傾き度
- ③脚の位置の非対称性(の段階) ④手の弛緩性(の段階) ⑤首部の弛緩性(の段階) ⑥後方への傾き度

B. 1) 動作 (movements)

- ①からだの回転度——椅子の場合 ②前後へのゆれ(の角度)
- ③うなづき(の回数) ④頭部の横ふり(の回数) ⑤手・指の動き(の回数) ——⑥を除く ⑥自己身体への接触(回数) ⑦物への接触(回数) ⑧脚の動き(の回数) ⑨足の動き(の回数) ⑩歩行期間(歩きながら話す)

2) 顔の表情 (facial expressions)

3) (内容以外の) 発言 (verbalizations) —— 発言量, 声の大きさなど

3. 行動の記号化

Birdwhistel に始まるとされている動作学の研究では、表情を中心に行動の

記述様式が工夫されてきている。そのうち、Kendon の記述法の一部を示そう⁽¹³⁾——他に、目、眉、口、手腕、視線の方向についても示されている。

頭の位置

- 1) □ (直立) 2) -□ (左傾) 3) □- (右傾) 4) ⊥ (左ふり)
5) ⊥ (右ふり) 6) ⊥ (後方かしげ) 7) ⊥ (前方かしげ) ——関連して、↑ (首のばし), ↓ (首すくめ)

肩や胴の位置

- 1) ⊥ (直立) 2) ⊥ (左傾) 3) ⊥ (右傾) 4) ∠ (前傾) 5) ∠ (後傾) 6) ⊥ (両肩つき出し) 7) ⊥ (両肩引っ込め) 8) ⊥ (両肩持ちあげ) 9) ⊥ (両肩さげ) ——ただし、6～9の記号は1～5に付加する：たとえば、⊥ は胴体を右にかたむけ、肩は前につき出す状態を示す。

4. Peng の手話の文字化

パンは、両手 (X) とその他の上半身 (Y) とを用いて日本の手話を分類しようと考へ、次の5つの形式のサインをあげている⁽¹⁴⁾。

- 1) XがYと接触し接触点の移動のないもの
- 2) XかYと接触し、接触点の移動のあるもの
- 3) XがYに接近していくことによって作られるもの
- 4) XがYから離れていくことによって作られるもの
- 5) Yから離れたところで、Xによって作られるもの⁽¹⁵⁾

そして、X側、Y側のそれぞれの接触点を身体部位別にあげている。また、接触点のないものでは、距離・高さ・幅の三点から区分している。

5. その他

また、舞踊や演劇の身ぶりや英語教育の方面で多くみられる日本人と英米人とのジェスチュアの差異にふれたものなどが間接的ではあるが参考になる面が多い。これらについては文献をあげるにとどめる⁽¹⁶⁾。

身ぶりの記述方法の一試案

非音声的行動の記述を考える上では大枠として、1. 活動の形態（行動主体が話し手が聞き手が、音声言語と独立した行動か否か、行動発生の状況は、など） 2. 姿勢・位置（立っているか座っているか、緊張しているか否か、からだ全体の向き、など） 3. 身ぶりの形状 の三つのカテゴリーが考えられる。1については音声資料との対応テキストの作成時に検討を加えることとし、また2については杉戸の論文⁽¹⁷⁾で示される予定であるのでここではふれないでおく。したがって3についてその記述の方法を考えることにする。

1. 身ぶりの形状記述方法

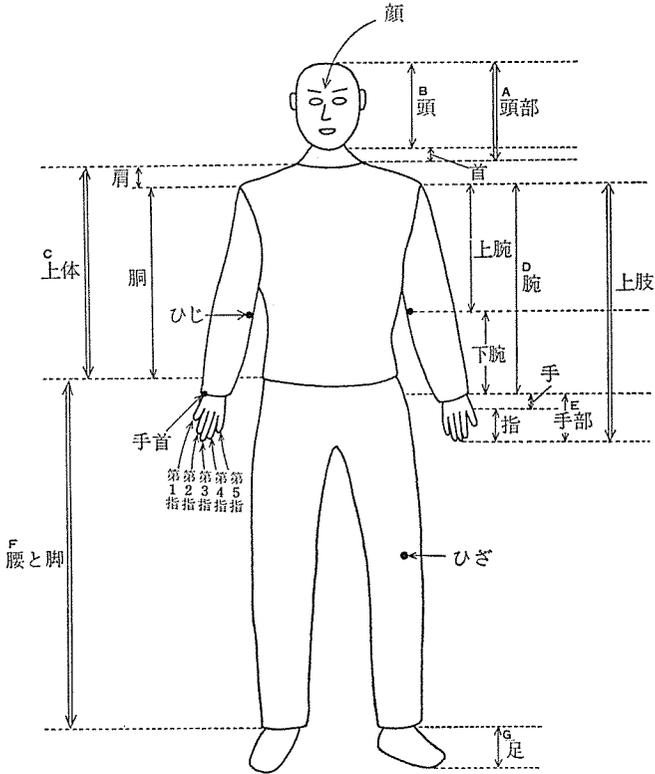
身ぶり・しぐさの形状を記述する方法としては前節でみてきたような種々の方式が考えられるがここでは、ある身ぶり・しぐさをの中心となる身体部位とその動きに特定の名称(主として、連用形転成名詞)を与え、それと音声言語とを対応させる方式を採用する。また、身体部位と動きの記述そのものについては Peng に近い方式をとる。Peng は身体部位を両手 (X) とその他の上半身 (Y) とに分け、XとXないしはXとYとの接触、接近という形で述記しようとしているが、彼が対象とする手話以外のものを含めた身ぶり全体を対象とする場合はXとYとの範囲を拡張しておく必要がある。本稿ではXを動作の中心となる身体部位(主部位)とし、Yを主部位が接触・接近する対象となる副部位あるいは空間と置きかえる。また接触や接近などの様態を演算子とよぼう。そうすると、身ぶりの形状は

身ぶり (G) = 主部位 (X) ・演算子・主部位 (X) または

身ぶり (G) = 主部位 (X) ・演算子・副部位あるいは対象となる空間 (Y) という形で示されることになる。

2. 主 部 位

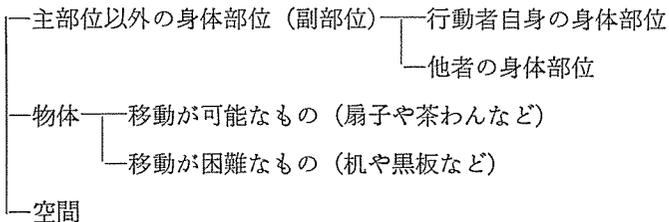
主部位は現時点では、頭部、顔、腕、手部、上体、腰と脚、足の七つに分けておく。また必要に応じて別の名称を用いたり、より細分化することになるが



部位名称の混乱をきたさないために“身体部位 JIS”のようなものを定めておきたい（上図参照）。

3. 副部位あるいは対象となる空間

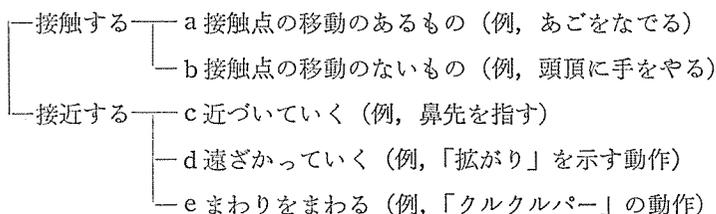
これは主部位が接触、接近する対象であり、以下に区分される。



副部位は主部位よりも相当細かく分ける必要がありそうではあるが、どこまで区分すればよいかは現在のところでははっきりしない。また、物体を上のように二つに分けるか、「移動が困難なもの」はむしろ「空間」と考えるべきかという点でも検討を要する。

4. 演算子

種々の観点から演算子を考えることができるが、基本的には次のように定める。主部位が対象、とくに副部位や物体に、



この他、必要に応じて、距離、高さ、幅、方向、回数などの付加情報をつけることも必要となろう。

主部位のみで生ずる動作と対象が副部位であるときの動作（物体の場合も同じ）を演算子を用いて示してみよう。

- 1° あごをなでる (手の平, a, あご) —— a の前が主部位, 後が対象となる空間, a は演算子の分類につけた記号。本格的な記述する場合にはすべてをわかりやすい記号に置きかえる必要がある。
- 2° 「お金」をあらわす身ぶり (第一肢, 第二肢, b) —— この場合, 第一肢も第二肢も主部位であり, 対象となる空間は特定されない。
- 3° 「私」をあらわす身ぶり (第二肢, c, 鼻) —— 男性に多い。女性では (手の平, b, 胸) が多い。
- 4° 「左巻き」をあらわす身ぶり (第二肢, e, 耳)
- 5° 拍手をうつ (両手のひら, b → d) —— 「両手のひら」は「左手のひら 右手のひら」と記録してもよい。また, 「b → d」は b (接触) の直後に d (遠ざかり) が生じたことを示す。
- 6° 両手を頭の後で組む ((両手, c, 後頭), b)

- 7° 「眼鏡のぞき」の身ぶり（(両第一指，第二指，b)，両眼）
- 8° 「緊張」あるいは「戦闘」をあらわす，左右の人指し指を数度たたき合わせる動作（両第二指先， $b \leftrightarrow d$ ） n —— n は（ ）内の動作を数回くりかえすことを示す。具体的な回数が必要ならその数を入れてもよい。

このような記述方式はかなりの程度まで有効であると考えられるが，単純化されすぎているため，逆に記述の方から元の動作を解读しようとした場合先に述べたような付加情報を積極的に取り入れなければ多義的になることも少なくはないといえよう。

以上と同じようにして，空間の場合の記述を考えることができそうではあるが，若干の検討を要する。たとえば，方角を示すような動作では指された方向は行動主体がたまたまどちらの向きに立っていたかに依存するだけであり，左とか前とかの方向にはさしたる意味がないことが多い。このような場合と，指し示された方向そのものが重要な場合とでは別の扱いが必要といえよう。

おわりに

このほか，身ぶりの物理的ないしは主観的な側面の情報化をも考えておかねばならない。というのは，素早い動きか否か，力強いかな否かということ以身ぶりの意味が異なる場合も少なくないからである。これについては8ミリフィルムあるいはスロービデオ装置を使用するなど分析機器の整備にたよらざるをえない面が大きいといえる。

本稿で示した行動の文字化の方法は，筆者自身にも考えが整理されていない部分が多く，本文中でふれたようなもの他にも多くの問題点があろう。たとえば，何をもちょうとまとまりの身ぶりや動作というか，いいかえれば行動の単位をどう設定するか，姿勢と身ぶり，動作との境界線を設けるか否か，といったかなり大きな問題がある。これらについては実際の行動を分析する段階でいろいろ考えていきたい。

<付記>

本研究は昭和52年度文部省科学研究費特定研究「言語」（「談話行動の実験社会言語学的研究」代表者 渡辺友左）を受けて行ったものの一部である。

注と文献

- (1) 佐藤信夫は「記号的身ぶり」（言語生活, 258, 1973）の中で、身ぶり言語について、「われわれは自分で発信していないメッセージをも受信されているのだ。その量は発信されたまま受信されずに無効化するメッセージよりはるかに多いと考えておいたほうがよい」とのべ、さらに「身振り言語はおもに『受信の記号学』の対象だと考えてよさそうである」「身ぶり言語の始末の悪さは、あきらかにそこには何らかの構造が存在するはずであり、しかもそれを安定した辞書にまとめることのできない流動性がつきまとう、という点にある」と指摘している。この指摘は非言語的コミュニケーション全般に適合するといえよう。
- (2) Argyle, M. 1973 “The Psychology of Interpersonal Behaviour (2nd ed.)” Penguin Books. 初版には翻訳（辻正三・中村陽吉訳 1972 『対人行動の心理』誠信書房）が刊行されている。初版では2と3とを合せて「身体的接近と位置」、4, 5, 9 を合せて「ジェスチャ」としている。
- (3) 南不二男 1977 「言語行動と副言語」（野元菊雄・野林正路編『日本語と文化・社会3』三省堂 収録）。この中では書きことばにおける副言語にもふれられている。
- (4) 林四郎 1973 「表現行動のモデル」国語学92（林四郎 1974 『言語表現の構造』明治書院 に再収されている）。
- (5) たとえば, Eisenberg, A.M. & Smith, R.R. 1971 “Nonverbal Communication”, The Bobbs-Merrill Comp., Knapp, M.L. 1972 “Nonverbal Communication in Human Interaction”, Holt, Rinehart & Winston Inc. Pfeifer, E. 1972 Communication and interaction (in Hine, F.R. & Rfeifer, E. (ed.) “Behavioral Science”, Little, Brown & Co. など。
- (6) Guirand, P. 1971 (佐藤信夫訳) 『記号学——意味作用とコミュニケーション』白水社 (1972)
- (7) Fast, J. 1970 (石川弘義訳) 『ボディー・ランゲージ』読売新聞社 (1971) が出たあたりから。
- (8) 非言語的コミュニケーション全般について、注2, 5の文献および下記のものなどが参考になる。
Weitz, S. (ed.) 1974 “Nonverbal Communication”, Oxford Univ. Press,
Mehrabian, A. 1972 “Nonverbal Communication”, Aldine, Chicago, 木戸幸聖 1976 『面接入門——コミュニケーションの精神医学』創元社。

- (9) 姿勢・身ぶりに近い意味の単語をざっと思いつくままにあげると、姿勢、姿態、運動、行動、行為、動作、動き、ジェスチャア、身ぶり、手ぶり、手つき、手まね、しぐさ、しな、所作、ふるまい、みぶり、そぶり、挙動など多種多様である。これらの語の意味は微妙に異なっており、筆者が対象としようと考えていることを適確に表わす語がみつからない。そのため、本稿では主として「姿勢、身ぶり」という語を用いるか、「しな、ふるまい」といった評価語を除く別の語を用いる場合もある。
- (10) 木戸の前掲書および木戸幸聖 1977「コミュニケーションと言語」臨床精神医学, 6., 9, による(原著は, Schefflen, A.E. 1964 'The significance of posture in Communication systems', Psychiatry 27)。
- (11) カテゴリー・システムと単位との問題は, 中村陽古 1974 「実験的観察法」(続有恒, 学阪良二編『心理学研究法10』東大出版会)を参照されたい。
- (12) Mehrabian, A. 前掲書。これは必ずしもカテゴリーシステムだけではなく、「評定法」的なものも含まれている。
- (13) Argyle, M. 1969 "Social Interaction", Tavistock Publication Ltd. の第三章の付録から。
- (14) パン, F.C. 1976 「手話の文字化」(田上隆司, パン, F.C. 編『手話をめぐって』文化評論出版)
- (15) この他に, 手だけで構成されるサインがあげられている。これは, Xを「一方の手」, Yを「もう一方の手」と置きかえることによって, 同様に分類することができる。
- (16) 舞踊, 演劇では次のものがある。
 千田是也 1966 『演劇入門』岩波新書
 戸部銀作 1973 「日本舞踊における身振りの約束」言語生活 258。
 江口隆哉 1973 「人間の身体表現」言語 2, 5。
 英語教育方面のものは比較的多い。
 Abercrombie, D. 1956 (宮田齊・田辺洋二訳)『英語教育の原理と問題』松柏社(1969)の第6章。
 西原忠毅 1961 『英語とジェスチャー』松柏社
 西山千 1972 『誤解と理解——日本人とアメリカ人』サイマル出版会
 カーカップ, J.・中野道雄 1973『日本人と英米人——身ぶり, 行動パターンの比較』大修館書店
 小林裕子 1975 『身ぶり言語の日英比較』ELEC 出版部。
 中野道雄 1977 『ジェスチャアの英語』創元社
 他に、『英語教育(大修館)』1973.1月号, 『時事英語研究(研究社)』1976.8月号などに特集がくまれている。
- (17) 杉戸清樹 1978 身ぶりを記録する——「変位」の記録表試案, 国立国語研究所報告集1。